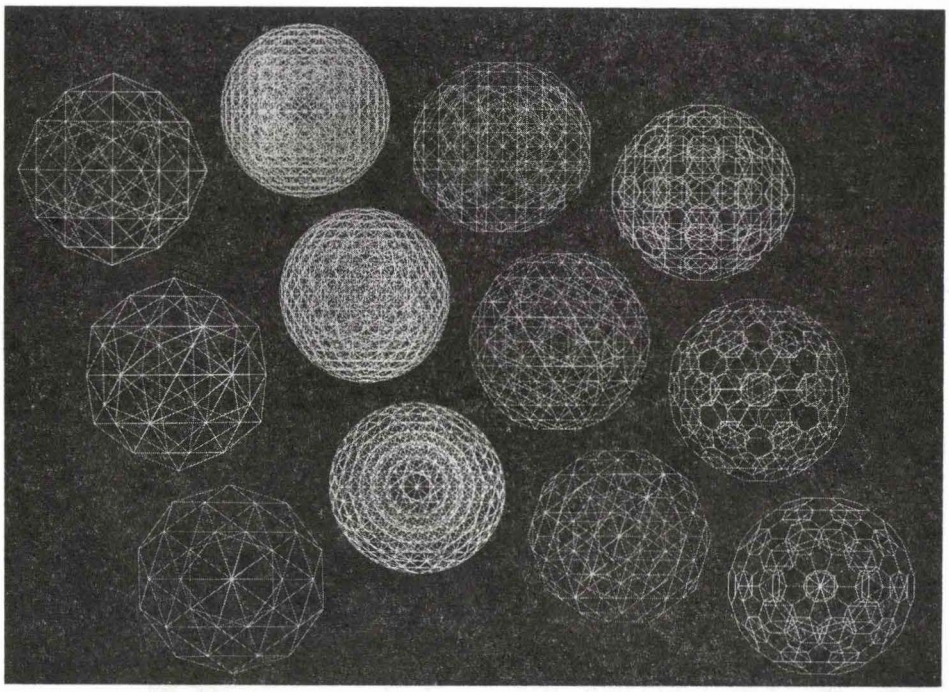
1989. 11. 1

京大広報

No. 379

京都大学広報委員会



4次元のウイルス
—関連記事
本文802ページ—

目　　次

＜大学の動き＞
サセックス大学との学術交流…… 800
平成元年度日本語・日本文化
研修留学生の受け入れ…… 801
部局長の交替…… 801
＜部局の動き＞
創設50周年を迎えた薬学部…… 801
＜紹介＞
教養部図学教室…… 802
＜資料＞
学生に対する国民年金の適用に
関する国立大学協会の要望書…… 804
人事院勧告の取り扱いに関する
国立大学協会の要望書…… 805
訃　報…… 805
附属図書館
維新資料展—屏風・器物・額—の開催…… 806
＜随想＞
思い出の京都大学
名誉教授　山岡　亮一…… 807
＜コラム＞
健康について考える
医学部教授　糸川　嘉則…… 808
写真集企画委員会からのお願い…… 808

＜大学の動き＞

サセックス大学との学術交流

本学と連合王国のサセックス大学との「学術交流に関する一般的覚書」が，平成元年10月５日に交換された。

これは，昭和62年10月西島総長がサセックス大学を訪問，先方も，昭和62年４月学長，昭和63年６月学術交流担当副学長代理が本学を訪問して学術交流に関して話し合いが行われ，さらに同年10月には，サセックス大学長から書簡による提案があったものである。

爾来，このことについて検討が進められると同時に，国際交流委員会の答申（関連記事『京大広報』No. 363）に沿って同大学と協議が行われ，平成元年６月本学として「覚書」を交換することが了承された。

この度，同大学フィールディング（Sir Leslie Fielding）学長が本学を訪問，総長室において，サセックス大学との「覚書」が調印された。

なお，当日，サセックス大学より西島総長に同大学名誉理学博士の称号が授与された。

京都大学とサセックス大学との学術交流に関する一般的覚書

京都大学総長とサセックス大学長は，両大学の教育研究の協力と交流を推進するために，ここに学術交流に関する覚書を作成する。

1．両大学は，特に次の諸活動を行うことを奨励する。

(1) 学術資料，刊行物及び情報の交換
(2) 教員又は研究者の交流
(3) 学生の交流
(4) 共同研究及び研究集会の実施

2．前項の諸活動の具体化については，両大学又はその関係部局で協議のうえ実施するものとする。

3．この覚書を変更又は解消する場合は，両大学の協議によるものとする。

4．この覚書は，日本語及び英語で作成され，両文書は等しく正文である。

平成元年（1989年）10月５日，京都

京都大学総長　　サセックス大学長
西　島　安　則　　サー・レスリー・
フィールディング

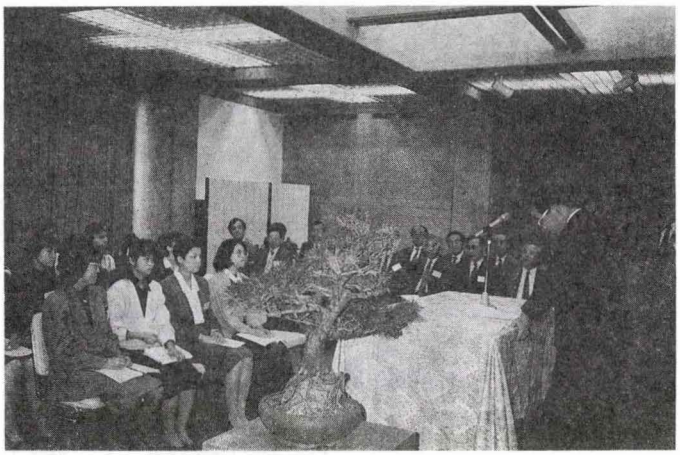
サセックス大学フィールディング学長から名誉理学博士の称号を受ける西島総長

平成元年度日本語・日本文化研修留学生の受け入れ

昭和57年度から，本学では「日本語・日本文化研修留学生制度」（広報No. 240参照）による留学生を受け入れているが，平成元年度は，10か国から13名を受け入れることとなり，10月16日（月）京大会館において川島良治国際交流委員会委員長はじめ関係教職員の出席のもとに開講式が行われた。

また，昭和63年度の留学生18名に対する修了式が，９月18日（月）京大会館において開催され，修了証書が授与された。

本年度の研修の概要は，次のとおりである。



昭和63年度日本語・日本文化研修留学生修了式

日本語・日本文化に関する授業計画と授業時間数

	授業科目	授業時間数 第一期(10～3月)	第二期(4～9月)	計
		時間	時間	時間
日本語	① 読解・口頭表現	30	30	60
	② 日本語講読	30	30	60
	③ 文章表現	30	30	60
	小計	90	90	180
日本事情	① 日本事情 (A)	32	26	58
	(ア) 日本の社会に関する概説	(10)		(10)
	(イ) 日本の法政に関する概説	(12)		(12)
	(ウ) 日本の経済に関する概説	(10)		(10)
	(エ) 各分野の諸問題		(26)	(26)
	② 日本事情 (B)	50	42	92
	(ア) 日本文学	(20)	(22)	(42)
	(イ) 日本文化・歴史（風土を含む）	(30)	(20)	(50)
	小計	82	68	150
特別教育	① 現代産業及び現代文化に関する参観・研修等	60		60
	② 伝統産業及び伝統文化に関する見学等		60	60
	③ 特別講義		30	30
	小計	60	90	150
	日本語強化コース	240	80	320
	合計	時間 472	時間 328	時間 800

（外国人留学生日本語・日本文化研修実施委員会）

部局長の交替

原子エネルギー研究所長

端野朝康原子エネルギー研究所長の任期満了に伴い，その後任として若林二郎原子エネルギー研究所教授（原子炉計測工学研究部門担当）が11月１日任命された。任期は平成３年10月31日までである。

＜部局の動き＞

創設50周年を迎えた薬学部

薬学部は，昭和14年３月30日，医学部薬学科として発足し，本年創設50周年を迎えた。これを記念して，薬学部では，平成元年10月20日（金）午後１時から京都ホテルにおいて，西島安則総長を始め，来賓・招待者・同窓生（薬友会員）約450名を迎えて，記念式典，記念講演会及び祝賀会を挙行した。

記念式典では，米田文郎薬学部長の挨拶の後，西島安則総長，井村裕夫医学部長，薬学部名誉教授を代表して石黒武雄名誉教授，卒業生を代表して宇野豊三名誉教授から祝辞が述べられた。最後に石橋一弥文部大臣を始め各界からの祝電が披露されて，式典はとどこおりなく終了した。

続いて午後２時から，新潟薬科大学長の矢島治

明名誉教授が「酵素の化学全合成を目指して」と題して，(財)基礎化学研究所長の福井謙一名誉教授が「化学反応と私」と題して，それぞれ専門のペプチド化学，量子化学の立場から記念講演を行った。

午後5時から行われた祝賀会は日本画「京都の四季」スライド併写によるシンセサイザー演奏（矢吹志帆氏演奏）に始まり，奥田　東元総長を始め名誉教授，卒業生からお祝いの言葉が述べられた。最後にシンセサイザーのBGMのもとに，スライドに見る京大薬学部50年のあゆみが，瀬崎仁教授のナレーションで紹介され，午後7時過ぎ，終始和やかな雰囲気で盛会した。

薬学部は現在，薬学科7講座，製薬化学科6講座の2学科13講座制をとり，我が国薬学の教育・研究の代表的機関として，教育・産業界に幾多の人材を輩出してきた。50周年を機に，さらなる学部の飛躍と発展が期待される。なお，記念事業の一環として「京大薬学史記」が刊行された。

（薬学部）

＜紹介＞

教養部図学教室

当教室は，第三高等学校（その前身の大阪中学校）にまで遡る古い歴史をもつが，その概要は，数年前の京大広報No.279（1984.10.15）に述べられており，ここではくり返さない。一点だけつけ加えておきたい。調査報告「京都大学建築八十年のあゆみ」によれば，二本松学舎（現教養部キャンパス）創設期（明治30年頃）の第三高等学校の建物配置が明らかになっており，当時図画（図学）室は，博物室とともに，メインの本校，事務室の背後（南側）の中心部に位置し，周辺を物理学実験室，化学実験室によってとり囲まれていた（図1）。図画の実習が，理科系実習の要として重視されていたとも読みとることが出来て，興味深い。

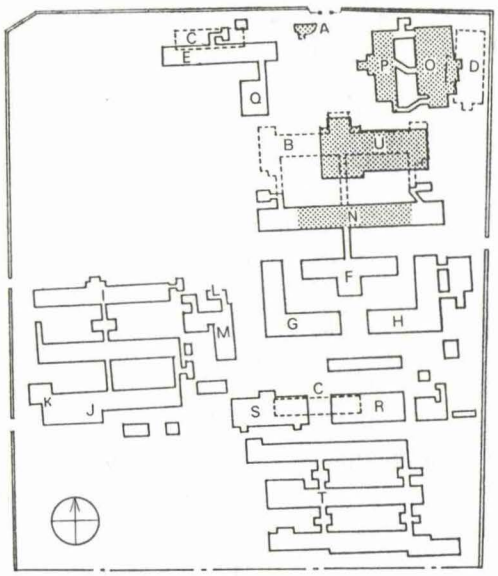


図1　Fが画学（図学）棟

戦後の学制改革に伴って，教養部図学教室として再出発し，脱皮しながら現在に至っているが，通じて小教室であり，現在常勤構成員は３名である。これまでもそうであったが，いまも建築学（工学部）出身者が所属している。工学部学生を中心に理科系学生に対し，演習・実習中心の教育を担当してきたが，近年，文科系学生にも開かれた講義を開講している。

図学は，高校までの教科目にも，大学専門課程においてもみられない科目であるが，このことは図学という学・術の他の専門諸科学と異なる特性を示している。人間の思考の働きは，言葉や数式の操作に拠ってと共に，図形の把握に裏づけられて分節され，伝達されるものであり，認識とともに創造能力も潜んだ層でその働きに負うところが大であると思われるが，こうした有意味な空間的思考の能力自体を表立って主題化して訓練するのが図学の，その教育の特異な目的である。

図学は，画法幾何学（Descriptive Geometry）を中核にして，一方で図形科学（Graphic Science），他方で製図（Drawing）の分野で構成されている。最近の社会的要請に応じて，他大学ではいわゆる CAD，CAM などの製図教育，図形技術（Graphic Technology）に図学の比重が半ば移行してきているが，本教室では，図形科学の分野に重点を移動するよう方向づけている。社会的動向への教育面での対応は，それを軽視するものではないが一先ず保留して，より原理的な，図形科学としての図学を開拓することが本教室の役目であると思われるからである。その場合，画法幾何学は，空間図形の投象をその本質契機としており，空間とその変換にかかわるこの分野の重要さは，教育，研究上どこまでも変わらない。

構成員は多様な研究にとり組んでいる。まず図学本来の研究として，多面体や曲面の高次元空間への拡張図形について，それらを２次元平面上での図あるいは３次元空間内での模型として表現し，それぞれの数理的性質を知ろうとするものがあげられる。一例として，表紙写真は，４次元正600胞体（３次元空間におけるウイルスの外形を決めることの多い正20面体の４次元拡張図形）のさまざまな変形をコンピュータ・グラフィックで描いたものである。また写真１は，正120胞体（３次元正12面体の拡張図形）の分解模型を示す。

図形，形体あるいは空間は，このように数理的

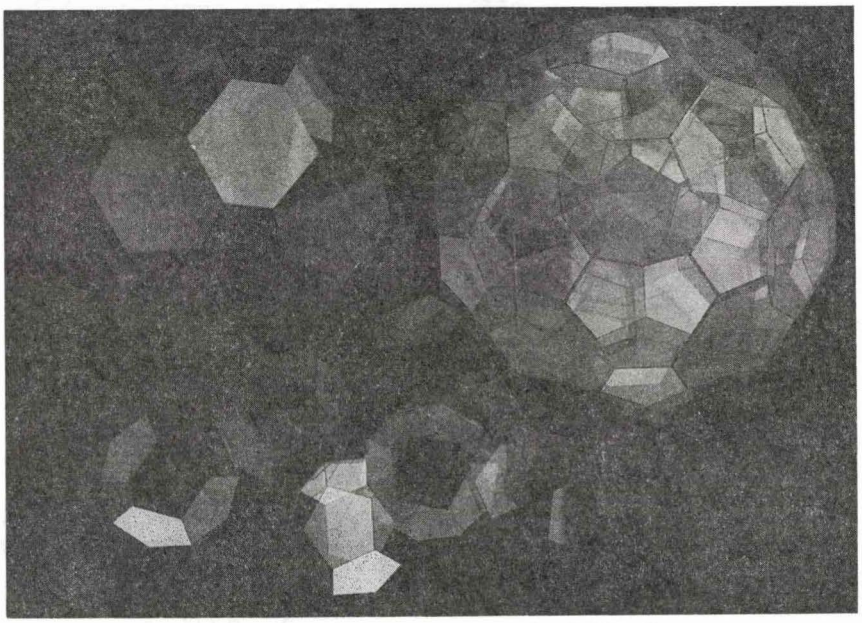


写真１　正120胞体（３次元正12面体の拡張図形）

に解明されるものであるが，同時に人間存在にとっての直接の生活空間としても重層して関心されるべきものであり，この層位での空間，人間存在の建築的場所を主題化した研究も，前任者の研究を引き継いで，成果を収めている。沖縄諸島における祭祀の場の空間現象を現象論的に精緻に解明する（図２）。それによって物的架構物としての建築の通念を一旦ラディカルに解体し，建築の将来に向けて，生活世界に即して仮設としての場所を再建することを探っている。人文地理学や文化人類学とも接点をもちうるものである。

図学の投象，変換の契機と建築学での設計行為とを連接して，空間構成，空間配置（dispositio）としての創作を，個々に実践的に行う研究も別に

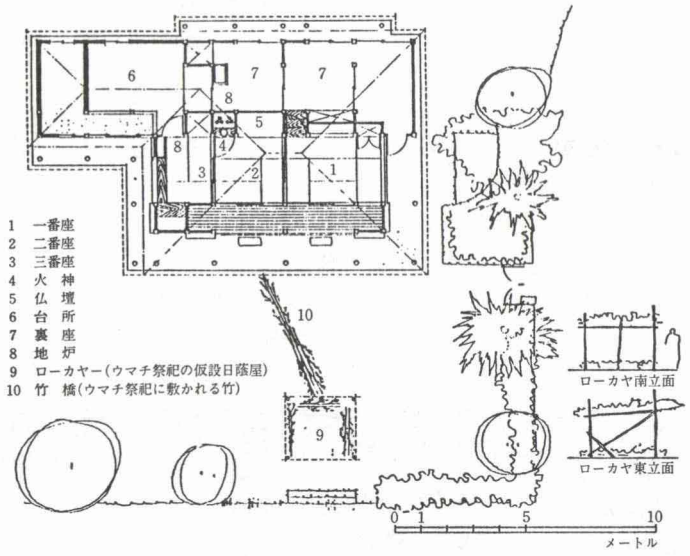


図2　久米島具志川村字与江州西銘家六月ウマチ祭場

あげられるが，この空間構成の作業は，人間存在の考察から出発した建築的技術論の原論的考案を下敷にして行われている。

本教室での研究は，このように多岐にわたっているが，しかしもともと（多義的な）空間事象とその投象，変換を共通に問題にする図学と建築学との学際的融合という視点からみれば，収斂している。研究の一部は他の諸学との総合への志向をもっている。その場合も，上にも述べたように，画法幾何学の基礎的一般教育の必要性は，変わらずに残るであろう。

（教養部）

＜資料＞

学生に対する国民年金の適用に関する国立大学協会の要望書

このたび国立大学協会会長から，学生に対する国民年金の適用に関し，以下のとおり文部大臣及び厚生大臣宛に要望した旨報告があった。

平成元年10月２日

国立大学協会会長
有　馬　朗　人

学生に対する国民年金の適用について（要望）

先の国会に提出された国民年金法等の一部を改正する法律案では，これまで任意適用とされていた20才以上の学生について，これを強制適用にすることとされております。

国民生活白書等でも明らかなように，大学生をかかえる世帯の家計は極めて苦しい状況にあり，このため，先の税制改革においても，大学生等の世代の子供をかかえる世帯について，扶養控除の割り増し制度が設けられるなど，政府におかれても，学生等をかかえる世帯の家計負担の緩和に努めていただいているところであります。

今回の改正にあたっても，こうした点に鑑み，年金審議会から「学生に対する国民年金の適用に当たっては，親の保険料負担が過大とならないよう，適切な配慮がなされるべきである。」との答申が出されていると承知しております。

政府におかれては，かかる事情をご賢察の上，本改正に当たって，学生本人及び学生をかかえる親の保険料負担が過大とならないよう，特に低所得者などについて適切な配慮がなされるよう，国立大学協会として強く要望致します。

人事院勧告の取り扱いに関する国立大学協会の要望書

このたび国立大学協会会長から，人事院勧告の取り扱いに関し，以下のとおり文部大臣，大蔵大臣及び総務庁長官宛に要望した旨報告があった。

平成元年10月５日

国立大学協会会長
有　馬　朗　人

人事院勧告の取り扱いに関する要望書

人事院による国家公務員の給与勧告が，労働基本権制約の代償措置として，また国家公務員の給与水準を適正に維持する制度として定着し，公務の能率的運営と公務員労使関係の健全性の実現に大きく寄与していることは周知の事実であります。

この３年間は，関係者の努力により，勧告どおり給与の改定が行われ，これにより各大学においても職員の勤務意欲の向上や，労使の信頼関係の保持等の点で好ましい影響がもたらされており，今年度の勧告の完全実施に対する期待には更に大きなものがあります。

もとより，当国立大学協会は，国の財政が極めて厳しい状況におかれていることも十分に承知しているところであり，各大学においては，過去数次にわたる定員削減及び行政経費の節減・抑制についても不断の努力を重ねております。

現在，国立大学においては，21世紀を目指す教育改革の一環として，高等教育及び学術研究の高度化の積極的推進が重要課題とされており，またこれが国民的期待でもあると考えます。これらの課題への積極的な取り組みを期待するためにも，大学教職員の適切な処遇を確保することが必要であり，このことがひいては優秀な人材を確保し，将来にわたる我国の高等教育及び学術研究の進展に寄与するものと確信いたします。

上記の理由により，国立大学協会は，本年度においても昨年と同様に人事院勧告が，完全に実施されることを強く要望する次第であります。

なお，調整手当の見直しにつきましては，「指定を解除する地域」の機関について，教育・研究に関わる者の人材確保の困難をきたすことのないよう慎重なご配慮をお願いいたします。

訃報

坂（ばん）　静雄 名誉教授

本学名誉教授 坂 静雄先生は，10月13日逝去された。享年92。

先生は，大正10年東京帝国大学工科大学建築学科を卒業後，本学助教授を経て昭和８年工学部教授に就任，同34年停年により退官され，京都大学名誉教授の称号を授与された。この間，17年１月から19年４月まで工学研究所協議員，20年２月から22年２月まで評議員を歴任され大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は，日本建築総合試験所所長，同理事長，同顧問を歴任され，現在は日本学士院会員である。

先生の専門は鉄筋コンクリート工学で，中でもコンクリート系構造物の塑性理論及び耐震設計法の研究において数多くの優れた研究業績を残され，コンクリート系構造物の力学体系を構築された。主な著書に『鉄筋コンクリート学教程』，『鉄筋コンクリートの研究』，『プレストレストコンクリート』及び『コンクリートハンドブック』等がある。

これら一連の研究活動，学術上の貢献に対し，昭和43年勲二等瑞宝賞を授与され，昭和61年度には日本建築学会大賞を受賞された。

なお，本学退官に際し，先生の輝かしい業績を永く記念して，先生の研究になるプレストレストコンクリート構造を使った坂記念館が建設され，退官記念事業会から本学に寄付された。この建物は昭和35年２月に竣工し，今日もなお工学部建築系教室の構造実験室として，教育・研究に使用されている。

ここに謹んで哀悼の意を表します。（工学部）

附　属　図　書　館

維　新　資　料　展 — 屏風・器物・額 — の　開　催

京都大学附属図書館に所蔵されている「維新特別資料文庫」は，品川弥二郎が創設した尊攘堂旧蔵の維新資料の収集です。尊攘堂は吉田松陰の遺志に基づいて創設されたものであり，従ってその蔵品構成は吉田松陰の書簡，上書，稿本等の遺墨，及びその類縁資料ですが，松下村塾の俊秀の遺墨，遺品も豊富です。しかしこの文庫は単に長州出身の志士の文献だけでなく，広く日本全土にわたり，また身分を問わず広く深く収集されています。

今回は，これまで一堂に展示される機会が少なかった「志士の屏風張交」「志士愛用の器物」の全容を展示し，これらと関係の特に深い「額」もあわせ公開するものです。

記

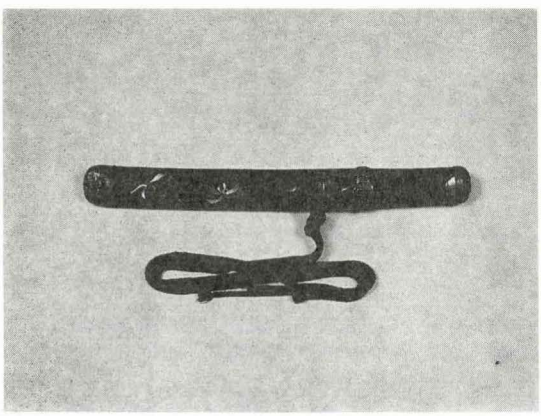
期　　間：　平成元年11月20日（月）～12月９日（土）
（日曜日・祝祭日・月末休館日（11/30）を除く）

時　　間：　午前９時30分～午後４時30分

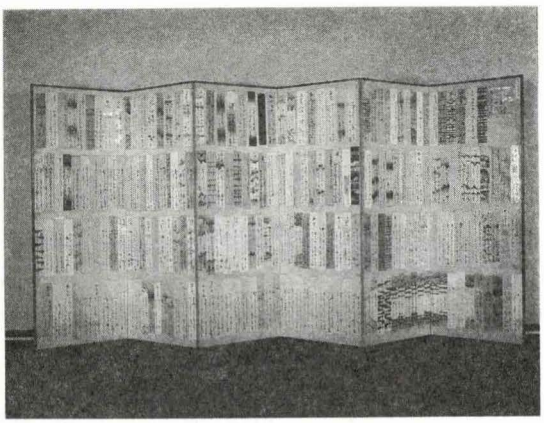
会　　場：　京都大学附属図書館展示ホール（３Ｆ）

（備考）　入場無料

（附属図書館）



短刀（奥羽鎮撫総督府参謀，世良周蔵所持）



勤皇志士遺詠屏風張交